

藤並の森

Vol.27

高知県立文学館

●「磯釣り賛歌」(写真提供／八井田晋)



リレー随筆㉗ 新しい清盛の出現 —— 古澤 陽子

京の町にさまで出る清盛もいい。面影の母を追つて、七条の姐御肌の徳に助けを求めたりする。徳から「ご挨拶のもんお持ちどすか」なんて聞かれ、「ご挨拶のもんとは何でござる」などと悪びれない。「お気持どすがな。お志のこと」。町娘徳と清盛のテンポのよい会話が聞こえてくる。

白河院が亡くなる少し前のこと、五位を賜つた十二歳の清盛は、朱雀大路でト盆の術をなす若僧に呼び止められ、不思議な体験をする。——そして、

熱い日々。
父忠盛と継母宗子とのあいだで、どこか落ち着かぬ幼い虎寿丸（清盛）があつて、その初々しいまなざし、悩める姿に私の胸はゆさぶられた。

「宮尾本」で読者をアッと驚かせたのは、壇ノ浦での安徳帝と守貞親王の替え玉入水である。時子が抱いて入水したのは守貞親王であり、安徳帝は守貞親王に成り代わって都に帰り、後白河法皇もそれを知つて知らぬふりをした。このくだりについては何人かの読者からお手紙をいただいた。史実を無視して……などの苦言は何もなく、だれもが宮尾さんの大胆な想のまえに言葉がない、というようすだった。

日本史の教科書とはちがつても、それまで書き継がれてきた「宮尾本」の流れのなかで、この「替え玉」はごく自然に受け入れられたのではなかろうか。そこに二位尼時子や知盛の妻である治部卿局明子など原典では存在のないまいな女性たちに、確かなキャラクターを与えてきた作家の眼が生きていることは言うまでもない。

宮尾さんは原稿用紙のひとますひとまことに「打立て」といわれる力強い文字を書いていく。「宮尾登美子の世界展」でもこの肉筆原稿が何よりも見どころだが、強靭な物語は強靭な文字から生まれるのだなあ、とつくづくと思うのである。（朝日新聞社出版本部）

宮尾登美子さんと初めてお目にかかったのは、二〇〇一年二月のことだつた。そのとき週刊朝日の『宮尾本平家物語』の連載は五十回をとうに越していく、そろそろ第一巻「青龍之卷」が出ようというころだつた。連載小説の担当者としては、かなり出遅れていた。不安いっぱいではあったが、それにもまして期待感が大きかつた。

何よりもひきつけられたのは、清盛の少年・青年時代の生き生きとしたさまである。その存在感は原典を読んで想像がつかなかつたものだし、これまで書かれてきたいくつもの「平家物語」にはない、まったく新しい清盛の出現だと感じられた。とりわけ「青龍之巻」の前半は、清盛の成長物語であつて、その初々しいまなざし、悩める姿に私の胸はゆさぶられた。

父忠盛と継母宗子とのあいだで、どこか落ち着かぬ幼い虎寿丸（清盛）がいる。謎（？）の美女、祇園女御や侍賢門院との出会いにドギマギし、六波羅の邸にいつのまにかあふれるようにな集まってきた異母兄弟たちとの活発で

自分が白河院の落胤だと聞かされた夜の、森の道の昂揚。清盛つて、こんなにすてきな人だつたんだ。

作家の力といつてしまえばそれまでだが、そこにはやはり、宮尾さんが長年にわたつて「平家物語」を読みつづけ、身の内に消化吸収して醸成させた「天然清盛」みたいなものができあがつていて、そこから読者をひきこんでしまう香気がじわじわと発せられているのではないかと思う。

◆次回企画展紹介◆

2005年2月11日(金・祝日)～3月21日(月・祝日)

宮尾登美子の世界展



書斎で執筆中の宮尾先生

「宮尾本 平家物語」は、(1)平成に生きている人間の目で書く(2)宮尾登美子が作家として書く(3)女性の目で書くといふ、この三つの視点から描かれているのが特徴です。

高知県立文学館では、二〇〇五年二月十一日(金・祝日)～三月二十一日(月・祝日)まで、「宮尾登美子の世界展」を開催いたします。

これは、週刊朝日に掲載されていた、「宮尾本 平家物語」の完結を記念して、朝日新聞社が立ち上げた巡回展です。当館では、二〇〇〇年に、「宮尾登美子展」を開催した経緯があり、今回、企画の段階から協力させていただきました。

この展覧会は、昨年、東京・日本橋と大阪・難波の高島屋で開催され、好評を博しましたので、ご覧いただいた方もいらっしゃることでしょう。一日の入場者は四千人を超え、会場は、いつも熱心な宮尾ファンの熱気に包まれていました。

構成は、「宮尾本 平家物語」の世界を中心のご紹介する」とともに、「先生の作家生活四十余年をふりかえり、宮尾文学の魅力に迫る」といった内容になっていきます。

『宮尾本 平家物語』

は、「週刊朝日」に四年間掲載され、昨年の四月に刊行された第四巻をもって完結しています。

この間、人の心の機微を豊かに描いた壮大な歴史ドラマは、多くの人々に感動を与えました。これまでの作家が描いてきた「平家物語」とは違い、「宮尾本 平家物語」は、(1)平成に生きている人間の目で書く(2)宮尾登美子が作家として書く(3)女性の目で書くといふ、この三つの視点から描かれているのが特徴です。

宮尾先生は、二〇〇四年十二月、朝日新聞社発行の『平家物語の女たち』に「平成に生きている人間が、七百年ぐらいまえからずっと伝承されてきた『平家物語』を読んだとき、何を感じたかということを書こうと思いました。だから、私は少し古典から離れてみようと思いまし

た。もちろん嘘を書くわけではありません。歴史小説というのには暦年を間違つてはいけない、人物像が今までの伝承とあまり大きく離れてはいけない、と最低限のことはありますけれども、やっぱり作家として書こうと。

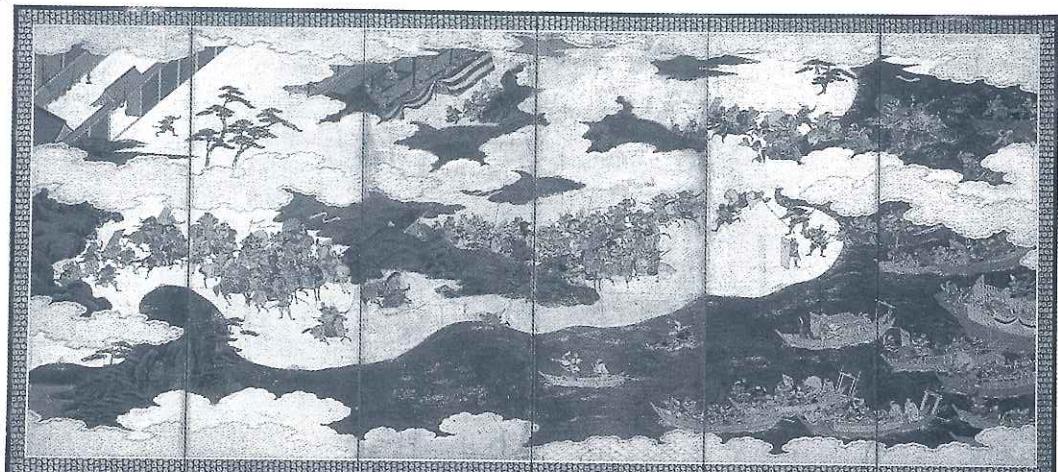
『源氏物語』や、他の古典を書く時は、みなさん注釈書を使うと思うのです。本文があって、さらに頭注や校注を参考にするのでしようが、私の場合それに重きを置かなかつた。だから私は、作家としての『宮尾本

平家物語』を書こうと決めました。頼るものはわが頭脳の想像力だけです。これは不思議だけれども、どういうことがあつたのかな、と想像力を働かせ、そこから周辺の古典をひもといて、物語を作り上げていきました。(後略)、また「中世の女たちも、今の女性と同じように喜び、悲しみ、苦しんだことでしょう。そ

ので、さくらに頭注や校注を参考にするのでしようが、私の場合それに重きを置かなかつた。だから私は、作家としての『宮尾本平家物語』を書こうと決めました。頼るものはわが頭脳の想像力だけです。これは不思議だけれども、どういうことがあつたのかな、と想像力を働かせ、そこから周辺の古典をひもといて、物語を作り上げていきました。(後略)、また「中世の女たちも、今の女性と同じように喜び、悲しみ、苦しんだことでしょう。そ

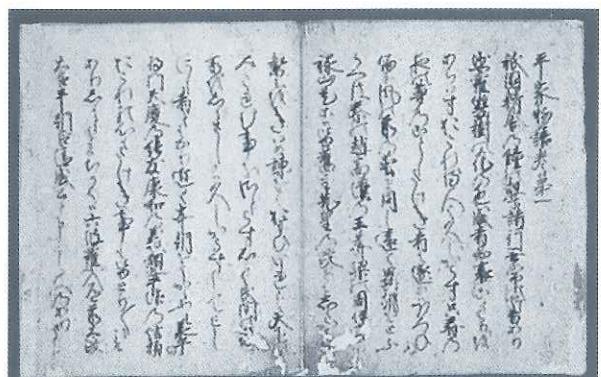
の一人一人に名前をつけ、名もなき女の人生を豊かに描きたかったのです」と書かれています。

『宮尾本 平家物語』では、清盛が心優しく、戦を好みない魅力的な男性として描かれています。また、登場する女性たちが、オリジナリティに溢れ、本当に生き生きと描かれています。謹多き清盛



源平合戦図屏風（香川県歴史博物館所蔵）

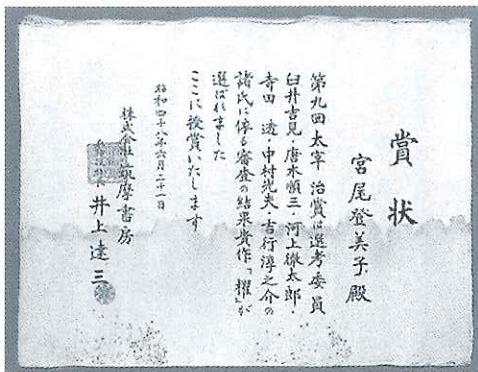
知盛の妻・治部郷局明子。先生独自の流麗な文体で、当時の日本の風土や因習の中で生きる女性たちの生き様が描かれており、「女人絵巻」とも言うべき作品世界へ私たちを引き込んでまいります。また、安徳帝替え玉等、「宮尾本 平家物語」ならではの展開も先生の想像力のなす技と感服したファンは、決して少なくないでしょう。



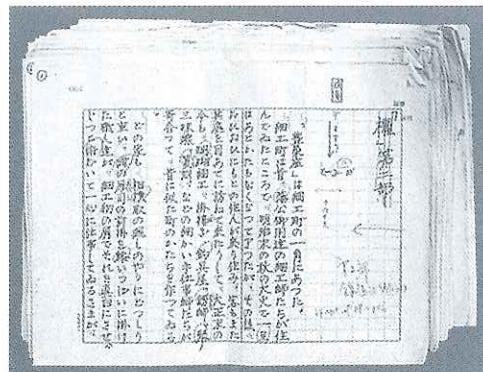
賞一本 平家物語（龍谷大学大宮図書館所蔵）

今回の展覧会では、九のコーナーに分けてご紹介します。

第一回「官房本『平家物語』の世界」の
コーナーでは、創作過程から完成までを
創作ノート、原稿、校正グラ、約三千六百
枚の原稿、掲載紙等を通してご紹介しま
す。また、龍谷大学が所蔵している『覚
一本 平家物語』や『平家物語関連美術
品』、先生が執筆された北海道の別荘の
模型なども展示します。第二部「自伝ブ
ック」では、先生の人生を振り返る
写真、手書きの文章、手稿などを展示し
ます。



「櫻」に贈られた太宰治賞の賞状（昭和48年）



「権」第二部の草稿

「櫂」「春燈」「朱夏」「仁淀川

なつた直筆資料や太宰治賞受賞の五百部限定の私家版「權」、生原稿、写真などを通じて紹介します。三部「作家への道のり」、コーナーでは、ケース一

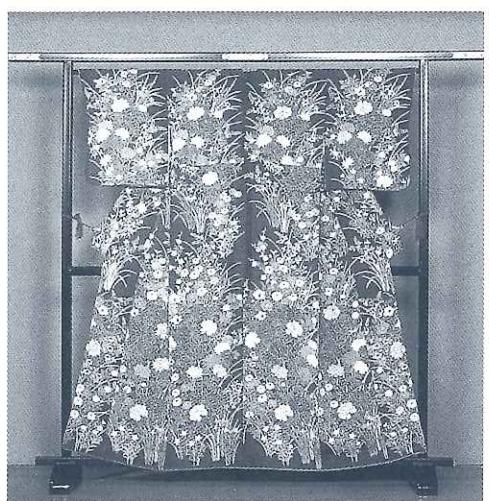


十一早苗作「椿子」

「ピュードル」と栄光と挫折の道のりをたどります。第四部「凜然と輝く代表作」では、「一絃の琴」、「序の舞」『蔵』、「寒椿」、「クレオパトラ」といった記念すべき作品を品世界を中心にご紹介します。関連資料や映画や舞台となつた作品のスチールや記念写真などを通してご覧下さい。第五部は、豆本や愛用していた着物四十五枚など、作つた「きものがたり」などの「特装本」のコーナー。第六部は、節目節目に着用した「着物コレクション」のコーナー。第七部は、「愛蔵品」のコーナー。第八部は、尾形拳、水上勉、津村節子、宇野千代といった人々からの書簡等で紹介する「交流関係」のコーナー。第九

部は、先生の著作本一覧のコーナーなど、約四百点を一堂に展示いたします。また、二月十一日には、宮尾登美子先生によるオープニングセレモニー、記念講演会、サイン会などもおこなわれます。

月より放映されています。これは、「宮屋本平家物語」をもとに、そののちに書かれたNHK出版発行の『義経』が中心になっています。



海外での初講演用に仕立てた
百花繚乱のちりめん友禅

主催	高知県立文学館
後援	朝日新聞社 高知新聞社
N H K 高知放送局・R K C 高知放	送・K U T V テレビ高知、K S S
K C B 高知ケーブルテレビ	さんさんテレビ・エフエム高知・
期間	平成16年2月11日(金・祝) 3月21日(月・祝)
(月曜日休館・祝日の場合翌日)	

学芸員メモ

「川端康成—文豪が愛した美の世界」展より

今回の展覧会は高知県立文学館が開館して以来の大規模な企画展でした。

美術作品の展示であるため、いつもの企画展示室ではスペースが足りず、常設展示室の大部分を会場としたことも初めての試みであり、「十使十宣図」（池大雅と与謝蕪村の競作）・「凍雲節雪図」（浦上玉堂）二点の国宝公開も初めてのことでした。また、芸術文化振興基金の助成を得て新聞広告やテレビCMという通常の予算ではできない展覧会告知を行うことができたのも初めてのこと。実のところ文学をテーマにした展覧会が対象となる助成というのは殆どありません。今は川端康成の愛した美術作品を川端自身の文章を添えて紹介し、美術作品が川端の文学にどのようなかかわりを持つていたのか、という文学展とも美術展ともいえる展覧会でしたので助成を得ることができました。

展覧会は国宝公開期間の制約から年に二会場までとされており、平成十四年度は、東京・サントリーアート館と京都文化博物館、平成十五年度は、山口・周南市美術館、平成十六年度は、仙台市博物館と当館の開催でした。

文学館での開催は初めてということとで、所蔵先の財團法人川端康成記念会と企画協力の水原園博（毎日放送事業局チーフ・プロデューサー）氏からは多くの協力をいただきました。

当館の展覧会は、いわゆる巡回展でも高知とのかかわりがあるものに関してはミニ・コーナーとして展示構成するよう

に心がけております。川端康成と高知とのゆかりを考えたとき上林暁と雑誌「風景」の編集者であった山本有光氏があがり、「高知とのゆかり」展示を企画しました。

一九二七（昭和二）年東大英文科卒業した上林は、難関を突破して改造社に上林が作家として出発した後も交流は続いている。

このミニ展示については、川端康成記念会評議員の平山三男氏と水原氏が来高されたときに相談し、川端康成記念会理事長・川端香男里氏が、深い理解を示してください、上林が川端に宛てた二通の書簡を選び、特別出品として加えてください。上林が「プロンズの首」で受賞した第一回川端康成文学賞の賞状の寄贈をお申し出くださいました。

この賞状はオリジナルの賞状が一時行方不明になっていたときに川端康成記念会で再制作されたものです。（のちにオリジナルも所在確認でき、現在は大方町あかつき館に展示されています。）

「風景」は、一九六〇（昭和三五）年から一九七五（昭和五〇）年まで刊行された雑誌で、作家・舟橋聖一が主催する「キャラの会」が編集し、東京都内の大型書店の団体「懶々会」の加盟書店が顧客サービスとして配布した雑誌です。

この「風景」に一九六七（昭和四二）年五月号から翌六年十一月号まで川端

が「一草一花」と題し連載した中に展覧会図録の冒頭に引用されている「伊豆の踊子」の作者

者（「最高の美にただただ感動するのが生きがひではない」）があります。そのとき担当編集者であった山本有光氏は原稿を受理したのち大切に保管されていたのですが、平成十三年、当館での展覧会を機に

「風景」関係資料を一括してご寄贈くださいました。

ミニ展示をご覧になつたお客様から「自筆原稿を読む樂しみ事を知つた」との感想をいただきました。川端の書も独特的の風格を持ち、素晴らしいものです。が、自筆原稿は、原稿ゆえに書作品とは別のリズムがあり、魅力を放っています。

展覧会準備期間に寄贈資料の中の自筆原稿を見ながら、使つていたペンを推測してみたことがありました。その原稿に使われたペンは縦横で肥瘦があり筆圧が強くかかると思われる所は太くなっていることから、しなりのある柔らかなペンであることが想像できました。

展覧会では、書齋の一部をイメージできるように愛用している山田紙店の原稿用紙や万年筆などが出品されていました



「一草一花」より「伊豆の踊子」の作者自筆原稿 高知県立文学館蔵

からかくら覧室



『一粒の砂』

— 小説、幸徳秋水の母多治子の生涯 —

山岡千枝子 著

「一粒一粒蓄積して陸を形成していく土砂の生業のよう」。わが子傳次郎のやつてきた思想もかれ一代で為し得る事業ではないかも知れない。それと判つていながら、我が子はその砂の一粒となつたのだろうか。」(本文一〇八〇一〇九ページより)

二十世紀最大の汚点と言われる「大逆事件裁判」。長い間タブーとされていたこの事件を、幸徳秋水の母、多治子の視点から描く。

一時帰郷したわが子秋水と、中村で過ごした親子水入らずの幸せな束の時間。やがて大逆事件に繋がっていく経緯が、秋水、多治子、秋水の妻千代子の書簡から明らかになる。

腸結核を患つた秋水のために、狸の毛皮で腹巻を作つてやり、大逆事件後は、老体をおいて東京の収監先まで面会に行く。いざれのエピソードも、母というもののがたさ、愛情の深さを感じずにはいられない。

（一）二〇〇四年八月十五日発行

で、展示するときに許可を得、手にとつて拝見したところ、一つは、モンブランが輸出専用に作ったマスター・ピース644ウイングニブ、もう一つは、ウォーターマンのパトリシアンという万年筆でした。いずれも柔らかな書き味の万年筆らしく、また上品な装飾が施されており、川端の眼にかなった万年筆として印象深いものでした。

今まで開催した美術館や博物館と少し違った展示としては、美術家たちが装丁した川端の単行本をお客様が手にとって読めるコーナーです。展覧会に最初からかかわっている水原氏から当館以降の開催会場でも可能な場所があれば提案して

みたいと喜んでいただき、川端康成記念会評議員・平山氏も記念講演会に和本綴じの「雪国抄」や、川端作品フランス語訳の美しい装丁本をわざわざ持参され、講演会参加者が手にとつて見られるように回覧してくださるなど当館にあわせた講演をしていただきました。

展覧会図録も出品作品の図版とそれにについての川端の文章が同じ頁に構成され見ても読んでも楽しめる好評でした。また、一階のショップでは文庫本を中心約二十冊を厳選し、川端文学に親しんでいただけるようなラインナップの中、「千羽鶴」、「山の音」、「一草一花」、ノーベル賞受賞記念講演の『美しい日本の私

その序説』が好評で、出品作品が大きく影響しているようでした。

なお、来年、展覧会は金沢21世紀美術館（四月二十八日～五月二十九日）と青森県立郷土館（九月十六日～十月十六日）で開催が予定されています。高知で見逃した方は、ご旅行がてら展覧会鑑賞に訪問されてはいかがでしょうか。展覧会情報は、川端康成記念会のホームページ(<http://www.kawabata-kinenkai.org/>)で確認する」とができます。（川島郁子）

県内同人誌紹介



『文芸香美』

年刊で来年は30年記念号を予定するまでは香美郡に定着した文芸誌。昭和51年秋、楠田利政の呼びかけで郡下の全町村に編集委員を置いて原稿を集め創刊した。地域に於ける文芸の作者を大半結集して創刊された経緯から息長く続いている。小説、隨筆、評論、戯曲、史談、詩、短歌、俳句、川柳等色々あつて面白い。物部川流域文化の代表と言つてもいい。作者と愛好者が一体になつて育てあげた地域文芸誌としての持ち味がある。

執筆者一一〇名、二三〇頁程度を毎号保つて29号まで来た。地域の特性に根ざした、其処に住む人の思いが、特殊でありながら一般性を持つまでの作品が目標。その意味で野村士佐夫（編集副委員長）の詩集「香長平野」の第三十七回椋庵文学賞受賞は大きな励みであった。

川端康成—文豪が愛した美の世界記念講演会

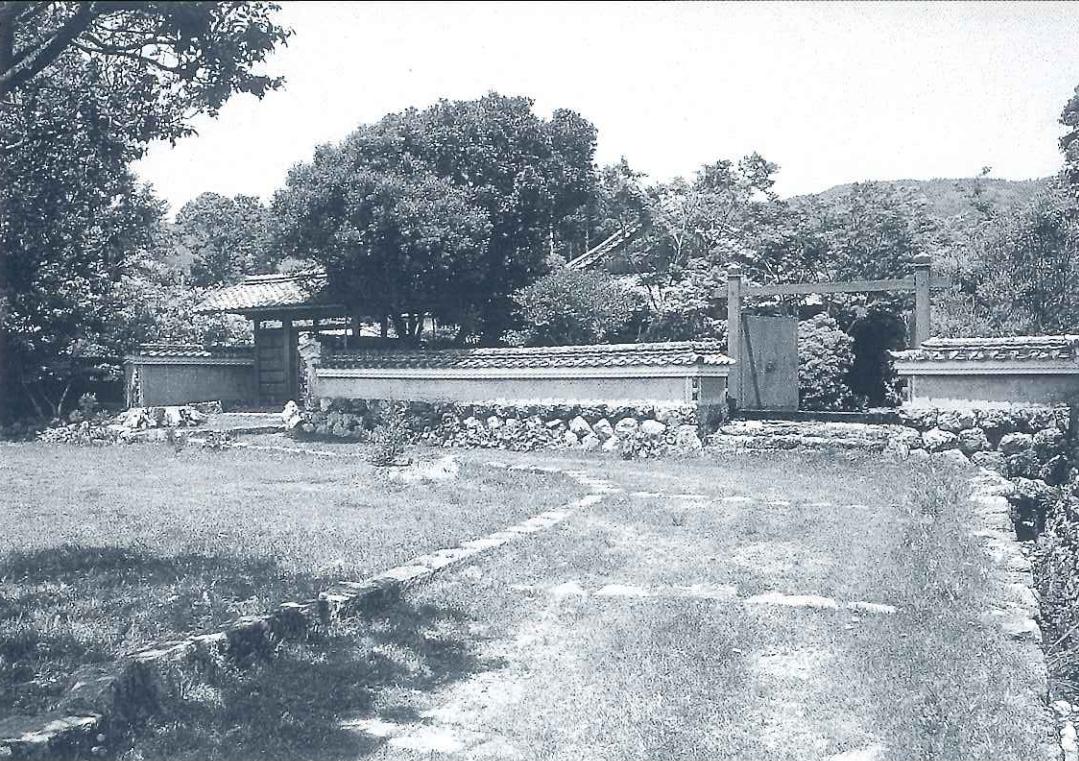


川端康成記念会理事長・川端香男里氏を迎えての記念講演会
高知城ホール（9月28日開催）

「流離譚」の里

安岡章太郎

猪野
睦



安岡家

十年ばかり前になろうか。よく晴れた晩秋だった。当時おこなわれていた文学散歩や自由民権史跡めぐりのひとつとして、山北の安岡家を訪ねたことがあった。安岡章太郎の「流離譚」が単行本上下二冊本で出たのは、昭和五十六年だから二十年あまりになる。そのあと一種の「流離譚」ブームといつたようなものもあって、自由民権運動への関心とともに、山北は知られるようになってきた。

「流離譚」の舞台となった高知県香美郡香我美町山北の安岡家は、かつてはお上家、本家、お西、お下家と呼ばれた屋敷からなっていた。時代の波のなかで、その四つの屋敷は一つひとつ消え、いまは安岡章太郎の父の生家であるお下家だけになってしまった。そのお下家の書院づくりの表屋敷などを、一行は訪ねて見せてもらうことができた。

二世紀はこす屋敷の門を入った庭と周辺には、よく伸びたツワブキが黄色い花を一面に咲かせており、表屋敷の縁側からは屏風にかなたの太平洋の水平線が、ビニールハウスや海岸近くのバイパス沿いの建物の透き間にわずかに光って見えた。おそらくかつては、続く田園の彼方に潮風を運んでくる水平線が浮き上つて見えていたろう。沖をゆく汽船の煙がこの縁から見えたという話も聞いたから一眺というところだったろう。

家まわりというより屋敷内の木立ちには小鳥がやってきて、さえずる清閑さが残つており、庭には梅、ミカン、柿、キンカン、栗の木、その下には菜園など、年中屋敷内になにかがとれる昔からの家とは、こういうものかという印象が残つた。

書院づくりの表屋敷の長押（なげし）には槍を納める工夫があり、床の間近くのスマには回転するドンデン返し、三尺四方のくぐり戸もあつて、武家型郷土屋敷に

は、こういう緊急時の自衛手段も施されていたのかと知つた。

事実、ここは吉田松陰門下、松下村塾の富永有隣が長州から逃れてきて、しばらくかくまわれていた所だつた。今までいう亡命者であるが富永有隣は、この安岡家をはじめ八年間にわたつて、県内古金党的家を転々とした。つかまつた時、あるじの安岡権馬はかくまつた罪を問われ、松山まで連れて行かれて獄死同然に生命を落とした。

さらに一族には土佐勤王党に加わり、終身刑で人獄するが、出獄後戊辰戦役に参加、会津で流れ弾で死ぬ覺之助、吉田東洋を那須信吾、大石團蔵と切り脱藩その後吉村虎太郎の天誅組に加わり捕らえられて処刑された嘉助、自由民権運動に参加していく道之助など、幕末から近代へむかう激動期に政治運動に参加する歴史を生きた人材がいた。家と人が時代参加のなかできしんできた姿が「流離譚」だつた。

「私の親戚に一軒だけ東北弁の家がある」という書き出しで始まるこの「流離譚」を、小説とも評論風ともいいう思いで時間をかけて読んだ。時間とかけてといふのは、幕末から白山民権運動期に至るまでの歴史のかわりを、現代につないで掘り起こしておき、高知の近代に至る激动を感じくりたどることでもあつたからだつた。時代の動いていくさまを安岡一族の変遷とともにとらえあげている歴史小説だつた。

そしてこの「流離譚」は作風も、読者が読み放れてくるところを見はからうように、調べていく作者の日常が登場していく。藏を探しフスマをはがし古文書を見つける山北が出てくる。そしてまた本筋に入つていく。おそらくそれに引っぱられながら読者の多くは近代史を受け取り納得させられていったのではないか。先日訪ねた時も庭には黄色いツワブキの群落が秋陽に映えていた。

▼横田晴光・「櫂上・下 宮尾登美子 筑摩書房」他 ▼小野義廣・「頃狂亭探古続 小野義廣著刊」 ▼細木嘉壽子・「歌集続・椎の花 細木嘉壽子 現代短歌を考える会」 ▼吉本治史・「田中光顕書簡 吉本徳治宛

昭和七年六月六日付「他」 ▼山形敬介

「詩集」GUILT 山形敬介

美 飛鳥出版室 ▼武政博・「船ゆうれいのぶんじい 武政博 青い地球 社」 ▼野村波津・「海辺の町で 野村波津 ふたば工房」 ▼渡辺トミ子・坂野スミ リーブル出版 ▼片岡文雄・

「森初美遺稿詩集」紙風船 森初

「呼夢書房」 ▼坂野スミ・「野火 坂野

「草の葉49集 草の葉同人編刊」 ▼

坂本明子・「芭蕉・蕪村・一茶真蹟集(新装覆刻版)別冊解説 平凡社

編刊」 ▼中内かず子・「蒼い駒駄 中内かず子 沖積社」 ▼遠藤善之・「折口信夫全集 全三十一巻・別巻総索引 折口信夫 中央公論社」他:折

口信夫(1887~1953)は大正・昭和時代前期の国文学者、歌人、詩人。筆名帆空。明治二十(一八八七)年二月、大阪府西成郡木津村(大阪市浪速区鷗町一丁目)に、父秀太郎、母こうの四男として生まれました。四十三年に国学院大学を卒業、教職を経て大正三(一九一四年)年に上京します。翌年歌人島木赤彦、民俗学者柳田國男と出会い生涯の方向が決定づけられました。六年から十年まで「アララギ」の同人として作歌、選歌の他に「萬葉集」の研究などでも活躍しました。五年

◆3日 土佐山内宝物資料館博物実習生5名見学。◆5日 マザー・ゲース展終了。◆8日 愛宕中学校生徒6名、引率者1名観覧。◆10日 ミニ企画「これは詩ではない」開幕。◆11日 「自作詩の朗読とパフォーマンス」参加者64名。◆12日 松井茂バフォーマンス&レクチャ。参加者15名。◆16日 (台風のための再講演) 第7回文学カレッジ(4回目)「上林暁・川端康成との縁」講師:松本秀正氏。受講者28名。◆18日 第54回朗読の会。第一部、第二部川端康成。参加者39名。◆19日 川端康成展準備のため27日まで臨時休館。◆28日 企画展「川端康成」開幕。オープニングセレモニー。記念講演会「川端康成の思い出」その人となりと文学(講師:川端香男里氏)。高知城ホール。受講者125名。◆29日 岡崎高知市長来館。

◆30日 ギヤラリー・トーケー。午後2時~3時。文学館2階企画展示室。参加者13名。◆31日 言りと紙芝居の会参加者8名。◆1月 9日 (台風のための再講演) 第7回文学カレッジ(4回目)「上林暁・川端康成との縁」講師:松本秀正氏。受講者28名。◆18日 第54回朗読の会。第一部、第二部川端康成。参加者39名。◆19日 川端康成展準備のため27日まで臨時休館。◆28日 企画展「川端康成」開幕。オープニングセレモニー。記念講演会「川端康成の思い出」その人となりと文学(講師:川端香男里氏)。高知城ホール。受講者125名。◆29日 岡崎高知市長来館。

◆◆◆ 文学館日誌 2004年9月~2004年11月 ◆◆◆

◆7日 ギヤラリー・トーケー。午後2時~3時。文学館2階企画展示室。参加者8名。◆13日 語りと紙芝居の会参加者8名。◆14日 ギヤラリー・トーケー。午後2時~3時。文学館2階企画展示室。参加者8名。◆15日 愛媛銀行親和会様10名観覧。◆17日 追手前高校生徒38名、引率者2名観覧。◆18日 戸内文学館連絡協議会17名様来館。／山本有光氏来館。◆19日 濑戸内文学館連絡協議会4名様観覧。／楠瀬兵五郎氏来館。◆20日 ギヤラリー・トーケー。午後2時~3時。文学館2階企画展示室。参加者20名。◆21日 企画展「川端康成」終了。◆22日 展示品入れ替えのため27日まで臨時休館。◆28日 第7回児童生徒文学作品朗読コンクール県審査。地区予選者119名。参加者22名。受賞は左記の方々です。

◆7日 ギヤラリー・トーケー。午後2時~3時。文学館2階企画展示室。参加者25名。◆9日 大学生生活協同組合団体29名様、子供2名観覧。◆11日 歌人佐佐木幸綱氏、谷岡華紀語りと紙芝居の会。参加者8名。◆10日 ギヤラリー・トーケー。午後2時~3時。文学館2階企画展示室。参加者13名。◆12日 大学生生活協同組合団体29名様、子供2名観覧。◆13日 歌人佐佐木幸綱氏、谷岡華紀語りと紙芝居の会。参加者8名。◆14日 吉井勇記念館次長、鎮西学芸員来館。◆15日 北九州市文化振興課視察10名様来館。◆16日 追手前高校生徒4名、引率者2名観覧。／追手前高校生徒4名、引率者1名観覧。／追手前高校生徒3年生39名、引率者1名観覧。◆17日 第55回朗読の会。特別企画「慶雲庵(茶室)」参加者23名。◆18日 小山いと子の令孫・西村氏来館。◆20日 台風23号のため午後3時に閉館。◆22日 枝川小学校生徒60名、引率者4名観覧。◆23日 「記念講演会「川端康成とその邂逅」講師:平山三男氏。高知城ホール。受講者90名。／ギヤラリー・トーケー。午後4時~5時。文学館2階企画展示室。参加者54名。◆26日 土佐山村教育長他1名様、県文化財課2名来館。◆30日 ギヤラリー・トーケー。午後2時~3時。文学館2階企画展示室。参加者14名。◆31日 宮尾登美子先生来館。

金賞 1名
土佐女子中学校 3年 杉本 沙紀さん
特別賞 岡野薰子賞 1名
土佐女子中学校 3年 中内 啓菜さん
銀賞 2名
土佐清水市立下ノ加江小学校 3年 横山 文乃さん
宿毛市立咸陽小学校 6年 藤崎安由美さん
郷土文学賞 1名
高知市立潮江南小学校 6年 布 悠斗さん
春野町立西小学校 1年 田中 友之さん
高知市立高須小学校 6年 森岡 愛さん
須崎市立須崎中学校 1年 坂倉 夏奈さん
入賞 12名
高知市立立派小学校 3年 金子 有沙さん
宿毛市立沖ノ島小学校 1年 石原 愛恵さん



受賞された方々



金賞を受賞された
土佐女子中学校 沙紀さん

葉山村立白石小学校 2年 下元 朔史さん
土佐清水市立下ノ加江小学校 4年 上原 佳子さん
大月町立弘見小学校 2年 小野いつかさん
宿毛市立沖ノ島小学校 4年 楠瀬舞春さん
安芸市立伊尾木小学校 5年 岩本 真佳さん
室戸市立中川内小学校 6年 川口 芽以さん
高知大学教育学部付属小学校 6年 岩本 鈴奈さん
安芸市立土居小学校 6年 小松 鈴奈さん
佐賀町立佐賀中学校 1年 森 サチカさん
安芸市立横浜中学校 1年 坂倉 夏奈さん
高知市立横浜中学校 1年 坂倉 夏奈さん

から翌年にわたり『口訳萬葉集』三卷を刊行。八年から国学院大学、十二年からは慶應大学で後進の指導にあたる傍ら沖縄本島・奄岐などの民俗調査や長野・愛知・静岡各県の郷土芸能調査を行いました。昭和四(一九二九)年から翌年にかけての『古代研究』三巻の上梓は、国文学の民俗学的研究における大きな成果となりました。折口は国文学・民俗として多くの著作があり、特に学・宗教学・芸能史などの分野で広い視野と鋭い洞察力により優れた独創性を發揮しました。折口は国文学・民俗の業績を残すとともに歌人・詩人としても数多くの著作があり、特に詩集『古代感愛集』は「十二年度芸術院賞」を受賞しました。二十三年日本学術会議会員。二十八年九月に病没。

このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました。『折口信夫全集』は日本芸術院恩賜賞を受賞しました。ご寄贈いただきたい資料はこの全集の新訂再版として四十七年から四十九年に刊行されたものです。

このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼申し上げます。



『折口信夫全集』

高知県立文学館カレンダー

2005年

1～3月

1月—January

2月—February

3月—March

催しもの

- 平成16年度 専門講座● 「宮尾登美子の世界に迫る」
 ◆第1回…12月11日(土) ◆第2回…1月22日(土)
 ・講師：渡辺 進氏（元市民図書館館長）
 ◆第3回…2月5日(土) ◆第4回…3月5日(土)
 ・講師：山川禎彦氏（作家）

※各回13時30分～15時

<場所>文学館1階ホール

若干、席に空がありますので、受講ご希望の方は、文学館までお問い合わせ下さい。

ミニ企画展

「すてきな絵本の世界展」 ～コールデコット賞受賞作品を中心に～

2005年1月30日(日)まで開催

<料金>一般350円（常設展含む）、高校生以下無料

コールデコット賞を受賞した名作絵本を中心に、時代を超えて愛されてきた絵本の数々をご紹介します。原書と翻訳本の絵本を実際に手にとってご覧いただけます。ゆっくりとページをめくってみて下さい。

関連行事

- ◇えほんのじかん ※要観覧券

<日時>期間中毎週日曜日 14時～14時半

<場所>文学館2階ロビー

山内家資料公開企画展

「国宝と重要文化財」

2005年4月2日(土)～5月29日(日)

於：2階企画展示室

宮尾本『平家物語』完結記念

「宮尾登美子の世界展」

2005年2月11日(金・祝)～3月21日(月・祝)

<料金>一般550円（常設展含む）、高校生以下無料

心の内を書き綴らざるにはいられぬ、波瀾万丈の人生を生き抜いてきた作家宮尾登美子。1973年、「櫂」で太宰賞を受賞して以来、独自の流麗な文体で長編小説を次々と発表してきました。「宮尾本 平家物語」は「週刊朝日」に4年間連載、昨年4月刊行の第4巻をもって完結。人の心の機微を豊かに描いた壮大な歴史ドラマは、多くの人に感動を与えました。

本展では、直筆原稿や写真などから「宮尾本 平家物語」の世界を紹介、さらに四十余年にわたる奥深い宮尾文学の魅力に迫るとともに、ご本人の着物などの愛蔵品も一堂に展覧。戦中、戦後の苦難を乗り越え、作家として成功した宮尾登美子の人生を生き生きとご紹介します。

オープニングセレモニー

2月11日(金・祝) 10時 高知県立文学館2階ロビー
 宮尾登美子先生によるテープカット

宮尾登美子先生講演会

2月11日(金・祝) 14時～15時30分
 高知県立文学館1階ホール 定員100名様
 ※ハガキもしくはFAXでお申し込み下さい。☆入場無料。

サイン会

2月11日(金・祝) 16時～16時30分
 高知県立文学館1階ロビー 先着50名

「宮尾本 平家物語を読む」

2月19日(土) 14時～16時
 高知県立文学館 朗読の会 高知県立文学館1階ホール
 ※当日会場へおいで下さい。☆入場無料

【休館日】1月——1, 3, 11, 17, 24, 31日 2月——7, 14, 21, 28日 3月——7, 14, 22, 28日

次回企画展紹介

江戸川乱歩・横溝正史らを育てた日本探偵小説の父

土佐人 森下雨村 没後40年記念展（仮題）

2005年4月21日(木)～6月2日(木)(予定) 1階ホール

大正9年創刊「新青年」初代編集長として多くの探偵作家を世に出した高知県佐川町出身の森下雨村（1890～1965）の没後40年を記念しての企画展。乱歩・正史や海野十三など「新青年」作家たちからの未発表書簡や貴重な写真、また、帰郷後の一農夫としての後半生と、愛した釣りの世界（遺著『猿猴 川に死す』）も紹介し森下雨村の果敢な生涯を振り返る。

利用案内

開館時間 午前9時～午後5時（入館は、午後4時30分まで）

休館日 毎週月曜日（休日・祝日の場合はその翌日）
年末年始（12月26日～1月1日）観覧料 一般350円
特別企画展のあるときは、料金が変わります。（上記参照）
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県（市）長寿手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳、被爆者健康手帳所持者とその介護者1名は無料です。

駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

E-mail:bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/

交通のご案内



- 高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分



高知市丸ノ内1丁目1-20
 電話 088-822-0231
 FAX 088-871-7857
 T 780-0850